

II 特別連載 II

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第367回

立命館大学の活動報告



野阪 克義 (立命館大学 理工学部副学部長)

インド・ニッテ大学から招へい

最先端技術や研究の体験と交流

今年7月10日から15日にかけて、インドのニッテ大学NMA MITから9名の学部生を受け入れました。立命館大学では、ニッテ大学NMA MITを対象とした、日本の科学技術について学ぶプログラムは2015年から実施しています。

今回は「工学分野」を主テーマとし、関連する専門分野の立命館大学教員による講義や研究室見学、「明石海峡大橋見学(維持管理技術)」や「スズキ工場見学(自動化技術)」を行いました。日本の最新の研究や技術に直接触れ、教員や見学施設の方々と意見交流をしていただくことで知識を深めていただきました。

「バイオエネルギー源である植物糖鎖の合成・分解メカニズムの解明」「構造ヘルスマニタリング・信頼性解析・維持管理計画策定」「建築情報学と人間科学による人・建築都市デザインの拡張と高度化」「視覚・触覚センサを中心としたロボットのセンシング・知能化技術」を研究テーマとする4人の教員から研究内容、研究室、研究施設の説明をしていただきました。生物学を専攻しているNMA MITの学生、引率教員の専門分野ということもあり、生命科学部生物工学科教員からの研究室紹介も取り入れることとしました。自分の専攻外のことであっても、先生方の研究内容を熱心に聞かれ、積極的な質問も多くありました。

日本の科学技術に直接触れていただくべく明石海峡大橋(維持管理技術)、スズキ(株)湖西工場(自動化技術)を訪問しました。明石海峡大橋では、世界最大級の橋の建設について、隠された橋の技術や歴史に関する説明VTRを視聴し、普段立ち入ることが出来ない管理用通路を通り、海面上約300mの主塔

プログラムスケジュール	1日目	関西国際空港に到着 オープニングセレモニー オリエンテーション 日本語講座・日本文化体験 歓迎会
	2日目	研究室訪問 立命館の学生とキャンパスツアー
	3日目	明石海峡大橋見学(維持管理技術) 伏見稲荷神社近辺散策
	4日目	スズキ湖西工場見学(自動化技術)
	5日目	調査・成果まとめ 立命館の学生と成果報告会 お別れの会
	6日目	関西国際空港から出国

までの間、各設備に関する説明を受けながら案内頂き、明石海峡大橋の塔頂を体験させていただきました。これだけ高度な技術が多く取り入れられた世界最大級の橋の構造に興味を持ち、担当者にも多くの質問が投げかけられました。また、塔頂からの絶景の景色には歓声が上がりました。

立命館大学の学生が、両大学の学生の親睦をより深めるため日本文化に関する説明を行い、箸使い対決をしたり、説明を交えながら折り紙で鶴を折ったりしました。

また、歓迎会や歓送会でも学生が主導で運営を行いました。歓送会では、習字体験や日本の駄菓子試食等の企画を実施してくれました。学生らが主体的に企画・実施したことで、会話も弾み、双方にとって良い国際交流の機会となったと考えます。「立命館大学の学生から受けた『おもてなし』は素晴らしかった」とのコメントも頂くことができました。

日本の文化や歴史、科学技術に触れることで、日本への興味・関心を高め、今後の研究交流・留学の推進を図るべく日本語講座の開講、日本文化体験(着物や袴の着付け)を行いました。笑顔で写真を撮り合う姿が印象的でした。おもちゃの刀も好評でした。

最終日には、成果報告会を実施し、滞在中に学んだ最先端の科学技術・日本文化に関するプレゼンテーションを行いました。プログラム実施後も、日印の学生、教職員間で連絡を取り合うなど交流が続いております。双方の学生や大学にとって貴重なプログラムになったと考えます。



和室で着付けを体験



大学研究施設の見学



成果報告会での発表



明石海峡大橋見学

●インド人学生からのコメント

・私はテクノロジーに最も感銘を受けた。誰もがテクノロジーの助けを借りて簡単に生活している。一般の人々の利便性のために、物事がいかに自動化されているか。また、日本の文化にも感銘を受けた。みんながみんなと協調している。規律と謙虚さ。そして最も重要なのは、おいしくて健康的で栄養価の高い食事で、ここでの時間を楽しんだことだ。

・プログラムは本当に良かった。スタッフのホスピタリティは本当に良かった。

●今後の展望

・短い時間にも関わらず、よく構成されたプログラムだった。短い時間であっても、私たちは一生忘れられない貴重な深い経験をすることができた。

今回のニッテ大学受入れプログラムでは、ニッテ大学生の生活サポートや学生交流企画等の企画・運営などに延べ20名以上の立命館大学生に参加してもらいました。参加学生にとって、日本にきているインド人大学生に対してどのように日本文化に触れてもらい、同時に楽しむことができるのか、を考えることは日本文化を再度見つめ直す機会になったのではないかと考えます。

参加してくれた学生からは「コミュニケーション能力、発表能力、グループワーク能力の向上を感じた」や、「語学の学習意欲が湧いた」などの感想を聞いており、学生自身の成長に繋がったのではないかと思います。

一方で、「工場見学や研究室見学ももう少し」と思うが、日本文化に接し、異なる環境で生活する人々との交流や、より多くの日本人学生との交流が必要では」との意見もありました。これら意見は今後受け入れプログラムに活かしていきたいと考えています。

今回はニッテ大学の学生を受け入れるというプログラムでしたが、2024年2月には立命館大学の学生がニッテ大学を訪問するプログラム(正課授業の一環として)が控えており、ニッテ大学との交流をさらに深めていく予定です。